



内大臣橋の下の津留地区では、昔ながらのかけぼしが行われる。清流に濡れた実は、約二週間に渡り天日干され、さらし質のよい米になる。

十月、山里のあちらこちらで小さな屋根が田に並んでいる風景に出会う。子供の頃は、その小さな屋根を見て、本当に人が住んでいるかと思っていた。「かけぼし」といって刈り取った稲を天日に干して乾燥させているのだと誰かに教えてもらった。どうりで人が住むには小さすぎるはずだと子供心に納得した覚えがある。

緑川をまたぐ内大臣橋の上から、その小さな屋根が並んでいる光景が目飛び込んできた。

「やっぱり春と秋がいい。特に、秋の田の風景と紅葉は毎年見ているにもかかわらず美しいですね。」

見慣れたはずの地元の人にとっても新鮮に映るらしい。初めて見る人が足を止めるのも頷ける。

紅葉、溪谷、内大臣橋、ヤマメの養魚場、猿ヶ城キャンプ場……。一帯は年々観光客が増えているという。

五月下旬に植えられた稲は、何人もの観光客が通りすぎる橋の下でスクスクと育つ。その間、稲のことに気づく人はほとんどいないだろう。

そして、秋……。かけぼしされた稲は一つの光景となって、橋の上から多くの人が覗きこむ。稲が黄金色に輝いているからか、それとも人々の心にある「郷愁」といった感じの何かを思いおこさせるからか。

かけぼしの期間は約二週間。水の豊富なこの地区ではもともと旨い米が取れる。かけぼしによって、米はほどよく乾燥され更に質のよいものとなる。

野良仕事を終えてホッとしている様子の夫婦が畦道を歩いていく。小さな屋根がその両脇に並ぶ。この光景がいつまでも胸に焼き付いて離れなかった。

小さな屋根の風景